



私的京都議定書始末記（その16）

－G8+3 エネルギー大臣会合（2）－

2013/09/18

英国で考えるエネルギー環境問題

有馬 純

日本貿易振興機構ロンドン事務所長、経産省地球環境問題特別調査員

ドラフティング会合で悪戦苦闘

第三次準備会合は、共同声明スクリーン上にドラフト案を映し、line by line でセットするドラフティング会合の形となる。スクリーン上にドラフトが映し出されると、色々ものを言いたくなってくるのがマルチ交渉官の習性である。各国がいろいろな修正案を出すたびに、それを瞬時に聞き取って、スクリーン上のドラフトにブラケット（括弧）付きテキストとして反映させていくことは、日本人の手に余る。このため、ネイティブを雇って議長席の隣に座ってもらうこととした。

6月4日のドラフティング会合は5ヶ国エネルギー大臣会合、G8 エネルギー大臣会合に関するものであり、こちらはスムーズに決着できた。本丸は6月5日のG8+3 エネルギー大臣会合共同声明である。ドラフティング会合を始めてみると、外国人を雇っておいてよかったと思い知らされた。一次ドラフト、二次ドラフトへのコメントを経た上で作成した三次ドラフトであり、各国のコメントをできるだけ反映したものにしたつもりであった。このため、最終調整が必要と思われるいくつかのパラグラフを除いては第三次案のままで通してもらおうという心積もりだったのだが、「会議は生き物」である。こちらが調整済みと思っていた「無風状態」のパラグラフに、ある国が修正コメントを出すと、それに触発されて別な国が逆方向のコメントをするという事態があちこちで頻発した。ようやく最終パラグラフまで議論を終えたときには午前零時近くになっており、しかも会議を始めたときよりもブラケットの数が増えてしまい、いくつかのパラグラフについては複数のオプションができる始末である。皆を缶詰にして夜を徹して調整することも考えたが、午前中から食事をはさんでぶっ続けのドラフティングである。準備会合メンバーの疲労も極限に達しており、何より議長として調停案を考える時間が欲しかった。このため、「明日、午前中に再度、ドラフティング会合を行う。ブラケットの付されたパラグラフについては議長調整案を提示する。午後には皆、青森に移動する必要があるので、午前中にぜひ決着させたい」と宣言して、メンバーを解放することにした。

準備会合メンバーは寝られるが、議長はそうはいかない。へとへとになってオフィスに戻り、議長調整案の作成に取りかかった。会議中には次々に出てくるコメントをさばくので手一杯であったが、落ち着いて眺めると、足して2で割ったり、コンセンサスのない部分を削除したりすることで、妥協案を作成することは可能なように思われた。6日午前中に会合を再開して、議長調停案を提示すると、昨日の紛糾が嘘のようにスムーズに議論が進んだ。皆、一晩寝て、頭を冷やしたこともあるのだろう。午前中に数箇所の未調整部分を除き、案文をセットすることができた。

IPEEC、セクター別アプローチの文言に合意

何より安心したのは、今次会合で最も重視していた IPEEC、セクター別アプローチ関連のパラグラフに合意できた点である。インドと前日に事前協議をして落としどころを探ったことは成功であった。マトウール局長は、事前の議論の結果を踏まえた案文を提示したところ、むしろ、合意を促進するよう議論に貢献してくれた。彼とは気候変動交渉でも頻繁に顔を合わせるようになり、そのたびにハグしあう仲になった。それぞれのパラグラフと成果ポイントを以下に掲げる。

10. Many of us recognize that aspirational goals for improving energy efficiency could help in promoting international efforts for exploring abundant global potential for energy efficiency. We will seek to ① realize the potential for improving energy efficiency in our own countries to the maximum possible through nationally and voluntarily determined measurable energy efficiency goals/objectives and action plans, while ensuring economic growth.

下線部①にあるように、APEC、東アジアサミットで合意された省エネ目標、行動計画の策定を盛り込み、更にその目標が単なる定性的なものではなく、「計測可能」(measurable) なものであるべきことを記載した。

11. Our efforts for improving energy efficiency can be further enhanced through international cooperation through sharing of best practices and promoting global partnership. To this end, ② we decided to establish the International Partnership for Energy Efficiency Cooperation (IPEEC). The IPEEC will serve as a high-level forum for facilitating broad actions that yield high energy efficiency gains, where participating countries see an added value. ③ They include supporting on-going work of the participating countries and relevant organizations, exchanging information of best practices, policies and measures and developing public-private partnership in key energy consuming sectors as well as on a cross-sectoral basis. IPEEC will consider ways to implement the outcomes of the Heiligendamm Dialogue Process on energy efficiency. We encourage all interested countries to join the IPEEC.

下線部②が IPEEC の設立に関するパラグラフである。下線部③では IPEEC の協力内容の例示であるが、その中にセクター別の官民パートナーシップも盛り込んだ。

12. Each of us can enhance the effectiveness of our respective national energy efficiency policies by ④ focusing on key energy consuming sectors such as industry, power, residential/commercial and transportation through analyzing/measuring current energy efficiency performance, evaluating energy efficiency potentials and identifying applicable technologies, taking into account our own specific national and sector-specific circumstances. ⑤ We also recognize that sectoral approaches as described above could be useful methods for improving energy efficiency. We will work collectively on their practical development. We welcome international cooperation and various initiatives through public-private partnerships that are conducive to promoting energy efficiency in key energy consuming sectors.

セクター別アプローチに関するパラグラフである。下線部④では、特定セクターに着目し、現在のエネルギー効率を分析・計測し、省エネポテンシャルと適用可能な技術を特定する、というセクター別アプローチの基本的考え方を明記した。また下線部⑤ではセクター別アプローチが省エネにとって有効であるとの点を G8+3 の総意として記述することができた。いずれも、APEC や東アジアサミットの合意文書よりも踏み込んだ内容になっている。

13. We highly ⑥appreciate the ongoing work on energy indicators. While recognizing that need to take into account specific national circumstances, ⑦they will help assessment of sectoral, national and international energy efficiency performances and potentials. Due to the need of collecting more timely and reliable data to further improve these indicators, we ⑧encourage governments and private sectors of all the interested economies to further cooperate in these efforts. Capacity building on energy statistics is essential to this end.

下線部⑥、⑦ではセクター別アプローチの重要なツールとなるエネルギー指標について記述した。IEA の作業ということを明示したかったが、非加盟国の中国、インドが IEA を特出しすることに抵抗した。下線部⑧ではエネルギー指標作成努力に関心ある諸国の官民が協力することを恣憑するという文言も盛り込んだ。

もちろん、当初の心積もり比してトーンダウンした点はあるが、これまでのエネルギー関連閣僚会合の合意内容よりも前進していることは明らかであった。大きな峠を越えた感があり、未調整の事項がいくつか残ってはいたが、翌日の 7 日午後には 5 ヶ国エネルギー大臣会合が開催されるため、日本、米国、中国、韓国、インドの事務方は 6 日午後には青森に移動しなければならない。そこで残された部分の調整は 7 日の G8+3 閣僚の歓迎ディナー終了後、ホテル青森の会議室で行うこととなった。

大臣会合前夜

6 月 7 日の 5 ヶ国エネルギー大臣会合はつつがなく終わり、ホテル八甲田で開催された歓迎ディナーでは甘利経済産業大臣が選んだミニロボットのお土産が大評判になるなど、大臣会合 1 日目は上々の滑り出しだった。各国事務方はそれぞれの大臣のお世話をしなければならないので、最終調整会合が始まったのは午後 10 時近くであった。

私にとって大きなハードルである省エネ関連のパラグラフは決着済みであったため、それほど時間をかけずに最終セットができるものと思っていたが、ことはそう簡単ではなかった。原子力に関する書きぶりでドイツが土俵際の抵抗を示したのである。

原案は以下の通りである。

19. We are pursuing different ways to achieve energy security and climate change protection goals. ① We recognize that a growing number of countries have expressed interest in nuclear power programmes

as a means to address climate change and energy security concerns. ②This is because nuclear energy can serve as base load electric power supply, emits no greenhouse gas in the process of power generation and reduces dependence on fossil-fuels.

当時のドイツはメルケル首相の率いる CDU と SPD の大連立政権であり、主レーダー政権時の脱原発政策を維持していた（後に原発推進に路線変更し、福島事故後に再度路線変更することになる）。ハイリゲンダムサミットにおける原子力の記述は、以下のようなもので、「原子力オプションを検討している国は、原子力がエネルギー安全保障、気候変動対策に貢献すると信じる」という極めて中立的な内容になっている。

Those of us who have or are considering plans relating to the use and/or development of safe and secure nuclear energy believe that its development will contribute to global energy security, while simultaneously reducing harmful air pollution and addressing the climate change challenge

ドイツの目から見ると上記の原案の下線部①はある種の趨勢を示すものであり、下線部②は、原子力のメリットを believe 等の主観を示す動詞を伴わない、客観的事実として記載しており、いずれも原子力に前のめりであると映ったらしい。事実、ドラフトをした私の思いは原子力についてもっとポジティブな位置づけをしたいというものだった。ハイリゲンダムサミットのような表現ぶりに戻すべきだというドイツの主張に対し、米国、日本、フランス等は、「原子力オプションを検討している国が増加していること、原子力がベースロード電力であり、温室効果ガスを出さず、化石燃料依存を下げることは、いずれも価値判断ではなく事実の問題。修正の必要なし」としてこれに強く反対した。ドイツ代表はベルリンとも相談する必要があるとして何度か会議を中断し、本国と連絡を取り合った。その結果、ようやく折り合った表現が以下の通りである。

19. We are pursuing different ways to achieve energy security and climate change protection goals. We note that a growing number of countries have expressed interest in nuclear power programmes as a means to address climate change and energy security concerns. This is because these countries take the position that nuclear energy can serve as base load electric power supply, emits no greenhouse gas in the process of power generation and reduces dependence on fossil-fuels.

下線部の recognize を note に、This is because の後に these countries take the position that を入れるということだ。何でも recognize に相当するドイツ語の erkennen は「真理を認識する」という語感があるらしい。「より多くの国が原子力に関心を有する」ことを「真理」として認識したくないドイツからすれば「留意する (note)」の方が望ましいということだった。他方、these countries take the position that については、ドイツ側は these countries believe that を主張したが、米国、日本、フランス等は「それでは主観的な語感が強すぎる」と反対し、結局 take the position に落ち着いた。ここらへんになるとネイティブの語感に頼るしかない。

その他、細々した事項で調整を行い、最終的に皆の拍手の下でドラフトがセットされたのは午前 4 時前だった。翌朝 9 時から始まる G8 エネルギー大臣会合のわずか 5 時間前である。皆に直前までの協力を感謝し、ドラフテ

ィング会合を終えたが、議長国の作業はそれで終わらない。そのまま作業室に行って、最終セット版が間違いなく共同声明案として配布されるよう手配し、併せて和訳、骨子を修正した。全ての事前作業が終わったときには朝になっており、そのまま大臣会合に突入することとなった。

ボドマン米エネルギー長官のねぎらいに感激

一睡もせずを迎えた G8 エネルギー大臣会合、G8+3 エネルギー大臣会合は一言で言えば大成功だった。私は議長役の甘利経済産業大臣の後ろに座り、各セッションの議論を甘利議長がまとめる際のメモ出しをしていたが、友好的な中にもフランクな意見交換が行われ、良い会合だったと思う。悪戦苦闘の末、前日明け方にまとまった共同声明も無事採択された。



G8+3 エネルギー大臣会合

会合が無事終了し、各国大臣が議長国日本に感謝する旨の発言をしてくれたが、感激したのは米国のボドマン・エネルギー長官が「本日の会議の成功は、あそこに座っている事務方の努力に負うところ大」と言って私の名前をあげてくれたことだった。ボドマン長官と甘利経済産業大臣はこれまで3回会っており、相互に強い信頼関係が確立されていた。私も甘利経済産業大臣の事務方としてボドマン長官との会談にその都度立ち会ってきた。そんなことで顔を覚えていてくれたのであろう。この一言でそれまでの苦労が吹き飛ばすような感じがした。会合終了後、甘利大臣が「一緒にボドマン長官にお礼に行こう」と言って下さったのも嬉しかった。

会合終了後、甘利大臣のご配慮で事務方を招いて夕食をご馳走になった。その際、なぜドイツが recognize に抵抗したのか、といった話をしていたのだが、途中から猛烈な睡魔に襲われ、あろうことか、大臣の前で居眠りをしてしまった。大変失礼なことをしたと今でも汗顔の思いである。